

保育者養成機関として、学生の造形表現技術を高めるには

－ 観察を通して技能向上へ －

岡 谷 崇 史*

To improve the students' teaching techniques for formative expressions in plastic arts as an
early childhood education institution

－ Skills improvement through observation －

Takafumi OKATANI

要約

保育者が備えておきたい造形表現技術には、様々な資質や能力を必要とする。本学科は短期大学のために、造形表現技術を短期間で、しかも効率的に身につける工夫と題材開発が重要となる。

本稿は、学生たちの造形表現（美術）経験値をもとに、粘土によるカブトムシの制作を実践事例とした。保育者として必要とされる「観察力を養う」「立体感覚を身につける」ことを目標とした題材である。

制作に目標段階を設けることによって、多面的な見方ができるようになった学生たちの取り組みや、カブトムシが完成するまでのプロセスを考察した。

[キーワード] 題材開発, 観察力, 立体感覚

[Abstract]

The teachers of young children are required to develop teaching techniques for formative expressions for their daily work, which means they have to acquire skills for various kinds of formative expressions in their qualitative teaching ability. For this purpose, it is very important for junior college teachers to devise practical methods to enable their students to acquire those techniques in a short term.

In this report, an experimental lesson is done based on the students' respective experiences in the field of formative production in which a beetle made of clay is produced as a practice example by each student.

I introduce some materials and practical examples targeted for “the development of their powers of observation” and “the acquisition of their stereognostic sense”.

I also consider the whole process of the experiment; what objectives are presented in each stage for their production and how the students have come to acquire multifaceted viewpoints in material development.

[Keywords] Material development, Power of observation, Stereognostic sense

* 受理年月日：2017 年 7 月 13 日 高松短期大学保育学科 講師

1. はじめに

子どもの造形表現活動を助長するために、保育者には様々な造形的能力が求められる。そのために、造形的な表現をするための技能と美しさを感じ取る力、いわゆる造形的感覚の双方の充実が必要である。子どもたちの造形活動の場では、保育者の造形的表現力は子どもの造形的活動を活性化させ、活動の質を高める上で大きな役割を果たす。その際に、子どもたちの表現活動の内容や質を吟味し、その時々の子どもたちの発達の状態、興味や関心を的確に把握することが保育者に求められる。よって保育者養成機関においては、学生にこのような資質をいかに獲得、伸張させるかが課題である。保育者が備えておきたい造形的な資質には、「感受性が豊かで観察力がある」「造形活動を発展的に広げる柔軟性がある」「造形的な基礎的な知識と技能の習得」「児童作品の良さを理解できる」などである。無論これだけではないが、基本的なものとする。

就学前造形教育については、多くの研究者や実践家が芸術による教育の意義を明らかにしている。R.シルマッハーは、「造形的な活動が世界の理解を助け、子どもの全体的な発達に結びつくことを、「身体（筋肉・目と手の協応・健康）」「社会性（自己・人間関係）」「感情（自己概念・感情表出・個性・自己制御）」「認知（思考・問題解決・言語・学び）」「創造性（独創性・創造性・言語と言語外表現）」の5つに分けていかに関与するかを論じ、その発達が相互に関連し合う」〔1〕と述べている。

またJ.デューイは、「手を使って物を作り出すという造形表現ほど、教育的意義を潜在的にもっている活動はないであろう」〔2〕と述べている。

創造的な思考を促すことは、子どもたちの日々の問題解決を助けるだけでなく、将来社会の中で生きていくうえで出会うであろう、さまざまな課題を克服するのに役立ち、創造性こそが21世紀を生き延びる鍵となるのである。その意味からも幼児教育の中核の一つであり人間育成に必要不可欠なものと言える。造形活動は知能と情緒の均衡を保って育成することができるのである。

保育者は、未来を担う子どもたちの驚きや発見に共感していく働きかけの重要性を理解しなければならない。そのような観点から造形活動は、『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』において、5領域の一つである保育内容「表現」の中で明確に位置づけられている。

世に多く出版されている「保育内容-表現 I」,「図画工作」に対応した指導書は、題材の内容が幼児、小学生に準拠したものが多い。そのことは、保育者を指す学生にとって具体的で実践的、直接的なもので否定するものではない。しかし、学生自身の造形表現の本質的な技術や能力が向上することに、必ずしもつながらないと考える。そのためには指導者として、造形表現技術を短期間に身につける工夫と題材開発が重要となる。

そこで本稿は、学生たちの造形表現（美術）経験値をもとに設定した題材と実践事例を紹介する。

2. 学生たちの造形表現（美術）経験値

学生たちも幼い頃より絵を描いたり、物を作ったりしてきた経験を持っている。幼稚園・保育所では造形表現として、遊びの中で親しんできたのである。その後、小学校では「図画工作」、中学校の「美術」、高等学校の「芸術・美術」へと科目名も変遷していく。指導者も課程別に沿った『学習指導要領』の「目標」、「内容」、「指導計画の作成と内容の取り扱い」に準じて題材設定を

する。ところが他教科と違い、積み重ねの知識や系統立てた技術の習得が見えにくい。教科書がありながら指導者によって題材を選び、実施されている現実がある。いわば、題材の内容は指導者に委ねられているのである。

本学科に入学してくる学生たちの中には、折り紙の谷折り、山折りが分らない、ハサミを使って紙をまっすぐに切れないなど基礎的な技術が欠如している学生もいる。

そこで造形表現（美術）に対して、どのような経験をしてきたのかアンケートを実施した。アンケートの対象は、本学科に在籍した 3 学年 166 名である。中には、中学・高校時代に美術部に属した学生も数名いるが、このアンケート内では問わないこととした。

図 1 は、最後に美術の授業を受けたのは、いつかの問いに回答した結果である。義務教育が終わる中学 3 年次が 75.9%と最も多かった。

結果については大体予想通りであるが、高校 3 年次が意外と多い。選択科目で「美術Ⅰ」ないし「美術Ⅱ」を継続履修したのである。多くの高校は大学受験に重きを置くため、受験に関係がない必修科目を 1 年次に履修させている。また、専門学科や総合学科では 2 年次、3 年次に芸術を学ぶ学校もある。2 年次ないし 3 年次で、芸術・美術も含んだ選択科目が教育課程に編成されている

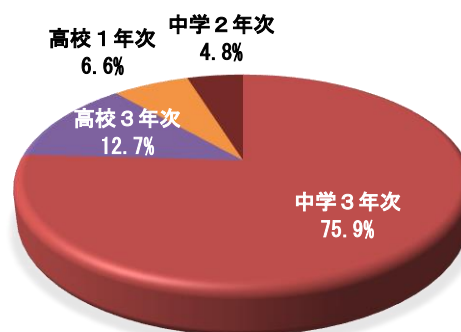


図 1 あなたが最後に受けた美術の授業は、いつですか。

ためである。高校の学習指導要領では、芸術Ⅰの「音楽Ⅰ」「美術Ⅰ」「書道Ⅰ」のいずれかを選択して 2 単位必修となつている。本学科の学生は、芸術の選択では音楽や書道を多く選択している。また専門学科では、芸術の代わりに当該専門科目を代替している高校もあり、高校時代に芸術の授業を受けない学生も少数いた。

図 2 は、水彩絵具（アクリル絵具やポスターカラーも含む）の使用について、どの位のブランクがあるのかを知りたくて項目に入れた。この問いは、図 1 の結果とほぼ重なると思っていたが、小学校や中学校 1 年次が最後だという回答は意外であった。小学校以来と回答した学生にとってみれば、少なくとも 6 年間のブランクがある。粘土や木工の工芸などの立体物、版画を制作することが多かったのであろうか。学生たちの絵具に対する経験の有無には、大きな差があることが分かった。

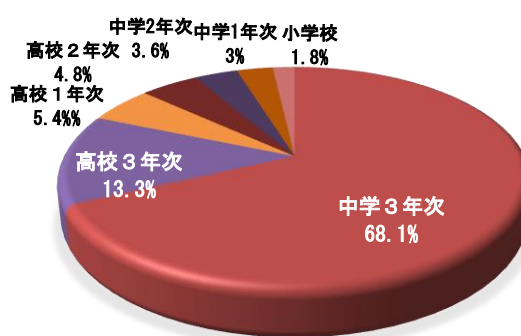


図 2 水彩絵具を使ったのは、いつ以来ですか。

図 3 は、粘土で物を作ったのは、いつ以来なのかという問いに対しての回答である。半数以上の学生が小学校以来という回答であった。粘土を扱う題材としては、人物、動物などを単独で成形する場合やビンや缶などと併用してペン立てや花瓶、また陶芸を制作する場合がある。しかし、

対象を観察して制作をすることではなく、モデリングの段階で留まっている。いわゆるイメージで制作してきたと思われる。

図4は、これまでの絵を描いたり、物を作ったりした経験からの認知である。「好き」「やや好き」「ふつう」まで含めると80.7%になり、この結果に指導者として少し安堵した。「やや嫌い」「嫌い」の学生の理由を聞くと「写實的に描けない」「不器用だから」、「成績が悪かった」などの内容が顕著であった。芸術科目の宿命で、「上手」「下手」という意識をもつ。「下手」という意識を持つことによって、制作意欲を乏しくさせ、さらに開放的にイメージが広がらず閉塞的な作品になりがちである。日頃から学生には、「上手」「下手」よりも感性が最も大切だと話している。感性は皆平等に持っている。もし、「上手」になりたいのであれば、対象を丁寧に観察して丁寧に描いたり、作ったりすることだと指導している。

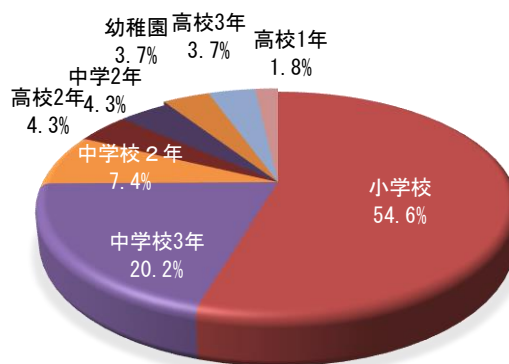


図3 粘土で物を作ったのは、いつ以来ですか。

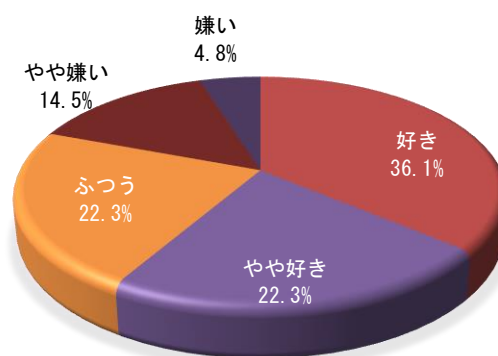


図4 あなたは絵を描いたり、物を作ったりすることが好きですか。

3. アンケート結果から題材設定へ

アンケート結果を分析すると、19.3%の学生が絵を描いたり、物を作ったりすることに苦手意識を持つ。学生からの聞き取りによると、観察して描写するのが苦手だという。ただ粘土を使っているものの作りは、小学校以来が多かった。粘土に対してはブランクが長いため、学生の得手・不得手の意識が比較的少ないように思われる。粘土による題材は、学生たちの苦手意識を緩和、払拭につながる可能性がある。粘土は、水分の加減によって粘性や柔らかさを調節することができるため、手に伝わる感触を楽しむことができる。粘土は、園でも広く扱われる材料である。ちぎったり、丸めたり、くっつけたりして形を自由に変えることができる粘土は、指先の力が弱い幼児にも扱いやすく魅力的な素材である。また、学生からも「粘土の感触が好き」「直ぐに形になる」「作品の上手・下手が分かりにくい」などと好まれる材料の一つである。粘土の感触が、安心と喜びを見いだすのである。

粘土を使っている制作には、「彫刻」と「モデリング」に区別して考えられている。まだ批判的な自覚のない時期の無意識な制作による表現は、「モデリング」とよばれている。それに対して三次元の意識的な表現は「彫刻」とよばれる。モデリングにおいては制作の過程が極めて重要とされている。一方彫刻では完成された作品に重点がおかれる。彫刻の場合と同様にモデリングにも二つの明確な技法がある。それは異なる考え方に基づくものであって次のようなものである。一つ

は、部分的な印象を組み立てて行くことにより想像した形態へ統合していく、いわば統合的技法であり、もう一つは、全体の形態から必要でない部分を徐々に削り取って行く方法で、この分析的過程を通して最終の形態を完成するいわば分析的技法である。統合的な考え方は、部分の印象を集めて統一されたまとまりにいたるという概念に属しているが、分析的な考え方は、全体としてのその外観上の表面のみに接近して行くのである。すでに指摘されたようにモデリングと彫刻の相違は、彫刻においては考え方に（粘土、木、石で「部分から構成して行く」あるいは「全体から削り取る」といった）技法との意識的な関連があるのに対して、モデリングにおいては制作の過程が純粹に直覺的なものといえる。

粘土を使つての題材も、様々な取り組みが考えられる。多くの指導書には、「粘土によるペーパサート」「土鈴作り」などが紹介されている。多くの指導書は、子どもたちを対象とした「モデリング」の活動である。子どもたちの触覺的な活動の意味を體驗的に理解し、認知面や情緒面にどのような作用があるかを考え、粘土製作技能の獲得の機会にもなるような活動が紹介されている。園で粘土を扱う際の留意点が丁寧に述べられていて、極めて実践的と言える。こうした指導書は、現場に立った時の指針になるであろう。しかし、保育者自身の本質的な技能や、資質の向上につながらない。保育者は、様々な資質を求められる。中でも觀察力を養うことは、子どもたちの活動にヒントを与えることができる。

そこで粘土を素材として、子どもたちに人気があり、特異な形をしたカブトムシを制作することにした。「觀察力を養う」「立体感覺を身につける」ことを目標に、できるだけリアルに制作することを目標とした。

表 1 主な粘土の種類

粘土には、たくさんの種類があり、目的や用途に応じて選ぶ必要がある。それぞれの粘土の特徴や欠点を挙げた。

種 類	特 徴	欠点とその解消法	硬化性
油粘土	比較的安価に手に入れることができる。時間が経っても硬化しないため、いつでも何度でも繰り返し作ることができる。	油脂独特のにおいがする。 べたつく感触を嫌がる ことがある。また、着色 することはできない。	非硬化
紙粘土	パルプを主原料とし、水や糊を混ぜ合わせたものが一般的で、比較的安価で、手軽に使用することができる。主な特徴として、乾燥すると軽くなる。柔らかいために細かい部分も作り込め、木やプラスチック等と組み合わせることができる。乾燥後に絵具で着色すること	乾燥すると再度つくる ことが難しい上に、乾 燥の過程で収縮しヒビ が入りやすい。一度開封 した紙粘土を長期間保 存する場合は、粘土の 水分を逃がさないよう	硬化

	ができる。また、成形する前に水溶性の絵具を混ぜて色をつけることもできる。	に、密閉できる容器で保管する。	
石粉粘土	紙粘土に石粉を混ぜ合わせたものである。キメが細かく、乾燥してからも削ったり、彫ったりすることができる。フィギュアなど細かな細工ができる。	粘りが少ないため、指先の力が弱い幼児には作りにくい。	硬化
樹脂粘土	合成樹脂でできており、色彩豊かで混色が可能である。細かい部分も作ることができる。固まっても弾力性があり、ヒビ割れができにくい。オーブンで焼くと固まる粘土もある。乾燥すると非常に堅くなる。	高価なため大量に扱うことが難しい。樹脂粘土はオーブンで加熱し、120℃～130℃を 20～30 分で硬化する。	硬化
小麦粉粘土	材料が食品なので、誤って口に入れても無害である。柔らかく成形しやすいが、夏季はカビが発生しやすい。	細かい工作には、不向きである。片付けの際は、安全衛生のためボウルや道具について小麦粉をしっかりと洗い落として拭き取らなければならない。	硬化
土粘土	柔らかく、細かな部分も作ることができる。比較的安価なため大量に使うことができる。陶芸用粘土は素焼きで土鈴をつくったり、釉薬をかけて食器やオブジェなども作ったりできる。	乾燥しても木づちで細かく砕いて、水の中に入れると溶けて再利用できる。常に乾燥しないように管理する必要がある。	硬化

以上のように、粘土の種類によって密度による重さの違いや、硬化後の堅さなどが違うため、商品パッケージで特徴を確認し、用途に応じて選ぶ必要がある。例えば、密度があって堅くなるもののほうが、乾燥後にヤスリやリューターなどで成形する時に、ポロポロと崩れてしまうことが少なく、細かい作業がしやすいといえる。今回の課題は、ある程度細部まで作るために、少し硬さをもち比較的安価な石粉粘土を用いることにした。扱い易い紙粘土でも良いが、柔らかすぎて細部を表現するには不向きである。

カブトムシは、生息する期間が限られている上に、体長が約 5～6 cm と小さい。生きたカブトムシをルーペで観察しながら制作することは、制作環境が乏しい上に小さなカブトムシを制作することは学生たちには困難である。そこで、日本放送協会の Web サイト『NHK for School「ものす

『ごい図鑑カブトムシ』は画像もよく、カブトムシを回転させたり、各部位を拡大したりすることができる。このサイトからカブトムシの上からと下からの写真、左右横、正面、背面からの写真計 6 枚を印刷して学生に配布した。図や写真の二次元のものから読み取って、立体である三次元に成形するのである。さらに実物大ではなく、体長 14 cm（ツノを除いた頭部から腹部まで）とし、制作がしやすい大きさに設定した。

事前にカブトムシに興味・関心を持たせるために、図画工作室でカブトムシを飼育して観察させた。また、夏季休業中の課題として、カブトムシの生態を調べさせたり、スケッチを描かせたりした。

4. 指導計画

科 目：図画工作Ⅱ

題 材：石粉粘土によるカブトムシ制作

目 標：カブトムシの制作を通して、保育者として必要な観察力や立体感覚を身につける。

対象学生：保育学科 1 年 43 名 ※43 名を、20 名と 23 名の 2 グループに分けている。

制作時間：10 時間 ※目標段階を設け、その都度達成できているか見極めを行う。

授業計画

時間 (回数)	活動内容	指導上の留意事項	目標 段階
1	芯材作り	定められた長さの針金を確実にビスで止める。	第 1 段階
2	粘土荒付	粘土を塊で付けていくのではなく、コイン程度の大きさでシュロ縄に擦り付けながら重ねていく。様々な方向からの写真をもとに成形する。特に、体長と幅、高さの比率に留意しながら粘土をつける。	
3	上部制作①	カブトムシは、上から見ると左右対称であることを気づかせ、正中線と芯材の中心がずれないように留意する。	
4	上部制作②	細部と全体のバランスを見ながら、大きく捉えていく。	
5	上部制作③	カブトムシの特徴を捉え、細部と全体の関連を意識しながら成形する。	
6	頭部とツノ制作①	指導者が用意したツノの型紙を利用して成形する。	第 2 段階
7	頭部とツノ制作②	細部と全体の関連を意識しながら成形する。	
8	腹部と脚部制作①	脚部は、胸部から V 字型についていることを理解する。	第 3 段階

9	腹部と脚部制作②	細部と全体の関連を意識しながら成形する。	
10	腹部と脚部制作③ 講評会	細部を作りながら、全体的に仕上げていく。	

カリキュラムの限られた時間のため、粘土で制作する時間をできるだけ確保するために、芯材は指導者が準備した。本来なら学生が題材の姿態に応じて、どのような部材を使い、大きさなどを考えて作るべきものである。芯材は、塑像する際には最も重要な作業である。針金と粘土は全く異質なものであるため、学生は芯材を準備するときに、しばしば芯材を制作することに集中するあまり、創造の概念は粘土から生まれるべきであるという原則を忘れてしまうのである。

芯材には木材と針金、シュロ縄を使った。針金やビスは、錆びにくいステンレスやアルミニウムを使用した。錆びると粘土の表面に錆が表出してくるためである。また、シュロ縄は芯材と粘土のくいつきをよくするためである。

芯材も様々な構成が成り立つが、今回は図 5 のように考えた。木材部分を大きくして、粘土を少なくする方法もある。小さいツノに針金は、不要かもしれないが、堅固にするため針金を入れた。あらかじめ指導者が、木材に足の位置を決め、ビスを仮止めした。用意した針金（前脚 34 cm，中脚 34 cm，後脚 37 cm，ツノ大 53 cm，ツノ小 21 cm）を配布し、学生は仮止めのビスに与えられた脚やツノの針金を巻きつけビスを固くしめるだけである。

次に粘土の食いつきを良くするために、シュロ縄を一人当たり 6m 配布し、固く縛るように指示をした。木材に対して均等に巻きつけていかないと粘土で成形していく中で、シュロ縄が表面に剥き出しになることがあるために注意が必要である。脚やツノの針金がシュロ縄を巻きつけることを妨げるが、針金も何度も繰り返し曲げると折れることを知らせる。

また、図 6 の状態から、さらに脚の針金にも粘土の食いつきを、よくするために細めのシュロ縄を巻いた。

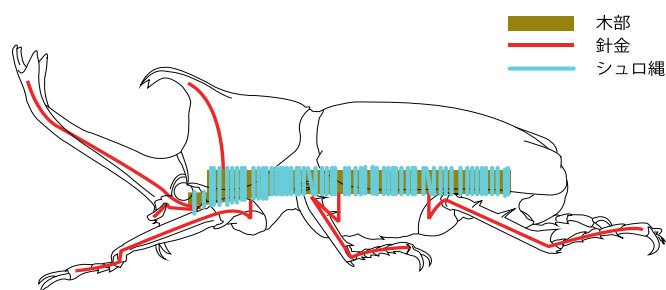


図 5 芯材の構成

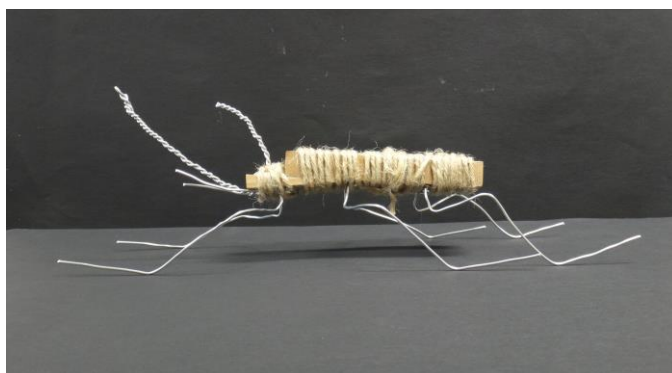


図 6 芯材

図 7 は、制作初期の学生作品である。制作が始まると一気呵成に、ここまで作ってしまう。リアルに制作することを目標としているが、指導者と学生の間でリアル度にズレが見られる。多くの学生は、丁寧に写真を多面的に見ることなく、ほとんどイメージで制作する。部分もさることながら、全体と部分の関連がこの段階では見えていない。そのため、カブトムシには程遠いものになる。頭部はゾウ、胸部から腹部にかけてはゴキブリのようにになっている。



図 7 制作初期の学生作品

5. 制作過程における留意点

学生が思い思いに制作を始めると当初の目標が失われ、收拾がつかなくなるため、段階ごとに制作した。第 1 段階として、大きなツノを除いた胸部、腹部の上部から制作した。到達目標が達すれば、次の頭部とツノを制作する第 2 段階へ、さらに第 3 段階と進める。段階を終えるたびに振り返り、留意点を指導する。制作が始まると必ず遅進者が出てくる。段階を設けることによっ

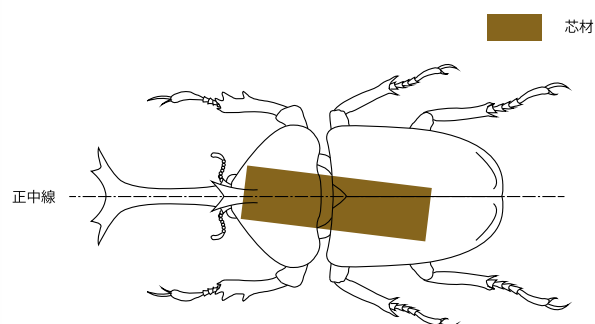


図 8 芯材と正中線がずれている状態

て、制作進度が追いつくのである。作り始めると学生の作品は、粘土をつけすぎて実際より膨らんでくる傾向がある。学生は、写真をよく見ず、感覚で粘土を加えるばかりで膨らんでしまう。そのため、ヤスリやリューター等で削る作業も必要となる。まず、学生は外形を夢中で成形しているため、芯材の中心とカブトムシの正中線がずれてくるのである（図 8）。正中線がずれるとツノの位置がずれたり、脚部を制作する際に脚の長さが異なってきたりする。

カブトムシの大きな特徴として頭部の大きなツノであるが、まず胸部、腹部の制作が重要と考える。

第 1 段階では、学生が制作している中で注意すべき点を 3 点挙げる（図 9）。学生の観察が、不十分で見落としてしまう箇所である。カブトムシの特徴を捉えるには、様々な点に留意すべき点がある。まず、カブトムシの頭部から小ツノにかけて、ほぼ垂直に立ち上がっていることを見落とす（図 9 の

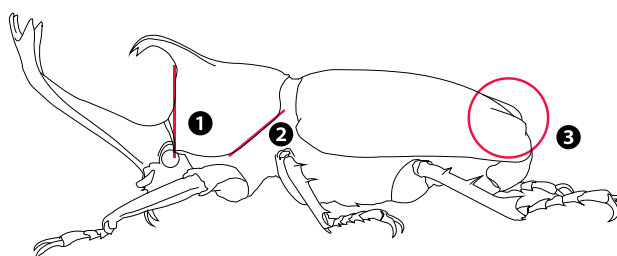


図 9 第 1 段階で留意すべき 3 点

①)。この部分はカブトムシの特徴の一つであると言える。垂直に立ち上がってないとカブトムシには見えなく、ゾウや他の昆虫に見えてくる。次に胸部にある斜めになった部分も見落とす。丸く膨らんでしまうのである（図9の②）。学生は粘土を付けるばかりで制作しようとする。粘土を一旦つけて粘土ベラで削ぎ落として成形する意識がないのである。削ることによって、シャープな成形ができることを分らせる。さらに、羽の後ろにある左右2つの突起を見落とす（図9の③）。

第2段階は、ツノを含む頭部である。たくましいツノは、最もカブトムシの特徴の1つである。ここでは、ツノが厚くなる、左右の大きさが違う、全体と部分の大小のバランスが違うなど難しい箇所である。そこで、指導者が餃子の皮をヒントにツノの型紙（図10）を作り、学生に配布した。そのことによって、ツノの形や、からだとツノのバランスも良くなった。

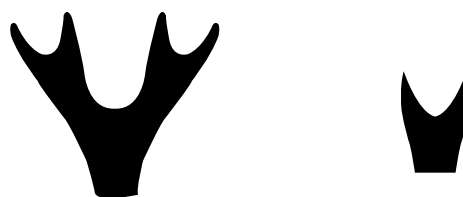


図10 ツノの型紙

第3段階は、下部の胸部、腹部、脚の制作に入る。ここで学生が陥りやすい点は、図11の④に示している脚の付き方である。胸部からV字型に付いているのである。学生の中には、胴体から真横に脚を付ける者もいたため、改めて写真や図で示し、よく観察するよう促した。確かにサイトの画像からも脚の形態が把握しにくい。ツノと同じく実寸大の型紙を用意した（図12）。ただ、型紙は平面的な外形しか分らない。脚の厚みや立体としての形の変化が分からない

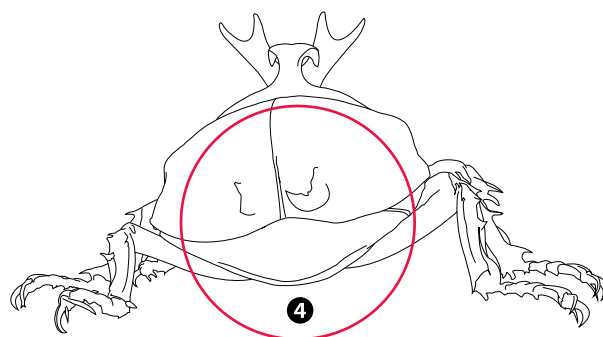


図11 脚の付き方

ため、写真と併用しながら制作することになる。この段階になると学生も工夫して、独自の粘土ヘラを用意したり、脚のトゲを作る際は和バサミを使ったりするなど進歩が見られた。

制作する中で、粘土を付けすぎた箇所にヤスリを使って粘土を削る作業がある。学生は、まだ粘土が完全に乾かないうちに使うため、ヤスリの目に粘土が詰まっている状態で使う学生もいた。道具の使い方を指導する場面もあった。道具を大切にすることや、園でも保管・管理に気をつけるよう指導した。

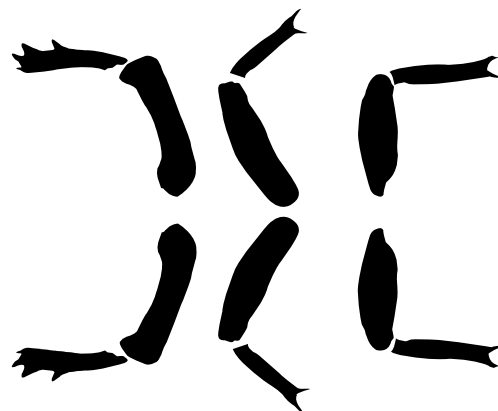


図12 脚の型紙

段階ごとの到達度設定や見極めを行うことによって、学生作品の全体的なレベルが向上しカブトムシらしくなった。

最後に講評会では、これまでの真摯な取り組みや工夫した点などを紹介した。

6. 制作を終えて

制作当初は多くの学生が、写真や図から立体に置き換えることができない。多視点的な見方に慣れてない上に、全体と部分との関連が結びつかないのである。学生の技術や経験値からすると無理もないことである。しかし、時間をかけ模索している中で徐々に読み取れてきた。本来塑像は、人物などのモデル（対象物）を様々な角度から観察して、粘土などで成形していくものである。三次元のを別の物質で三次元に再現する。しかし、今回の課題は平面の二次元から、立体に再現するため、平面からの読み取る力が重要となる。指導者は、第 1 段階の導入部分で学生に多視点的な見方、読み取る力を導かなければならない。学生に分かりやすくするために、指導者自らがカブトムシの参考作品を制作し、学生たちに説明をしながら提示した。

制作を終えて、感想文を書いてもらったところ以下のような内容が書かれていた。

- ・ カブトムシは立体なので、多方向から見ながら作らないと正確にできないところが難しかった。
- ・ 集中力と忍耐が必要だとわかった。
- ・ ただ粘土を付けていくだけではなく、削ったり、水をつけたりする技術を学べた。
- ・ 今まで図工とか美術は苦手で、逃げていた部分がありました。けれど今回は、何か自分自身が変われたと思います。
- ・ 何度もヤスリで削ったりして、もっと慎重かつ丁寧にすれば良かった。
- ・ だんだんカブトムシらしくなっていくので、意欲が出てきた。
- ・ 石粉粘土は少し硬いので、年中・年少の子供たちには大変かもしれない。
- ・ 細かい作業をすることで、集中力も高まるのではないかと思った。物をじっくり観察することや、時間をかけて丁寧に作業することは普段なかった。
- ・ リアルに作ることは、難しかったけど充実した時間だった。
- ・ 制作していくうちに、今まで知らなかったカブトムシの構造がわかった。作る楽しさや面白さも学べた。
- ・ これまで、これほど集中して制作したことがなかった。
- ・ 制作していく中で、自分の作品に愛着が湧いてきた。

【学生作品】



図 13 学生 A



図 14 学生 B



図 15 学生 C



図 16 学生 D

7. 今後の課題

学生からの感想には、完成後着色をしたかったという意見があった。カリキュラ上の時間が限られているため、着色する方法を伝え、授業内では行わなかった。今回は白い石粉粘土を使ったが、あらかじめ茶色に着色することや、完成後に自由に色を着色することもできた。しかし、色彩に振り回されることなく、形を追求するには白い状態の粘土が良いと判断した。学生にとって、白いカブトムシは違和感があるのである。指導者としては、白い造形物としての形の美しさも感じ取って欲しい。

今後の課題としては、サイトの画像から分かりにくい脚のたい節やけい節部分を図で表す方法も考えている。また、型取りで成形できるようにすると、制作が容易になり時間も短縮できると考える。

8. おわりに

カブトムシをできるだけリアルに作るということは、学生にとっては難しかったであろう。しかし、リアルといっても美大生が制作するような完璧なものは求めていない。本学科の学生は、デッサンを学んでいないため、出来上がりには限界がある。カブトムシらしさを表現する最低の水準で留めている。

この課題を通して、石粉粘土の特質を理解し、観察することの大切さや、多視点的な見方も身

についてと考える。多くの学生は、これまで長い時間をかけて、ものを作った経験がない。プロセス時の学生からの発言、制作後の感想文から達成感や充足感があったと回答している。長期間にわたって制作意欲を持続する難しさも分かったであろう。また、ものを作ることに苦手意識を持っている学生も、少し自信が持てたのではないだろうか。

将来、学生たちが保育の現場に立った時に、このカブトムシが教材や、壁面装飾の一つになるのが楽しみである。子どもたちから羨望の目で見られるであろう。

引用文献

- 〔1〕 槇英子、『保育をひらく造形表現』，萌文書林，2016年
- 〔2〕 J. デューイ，杉浦宏/他訳『明日の学校教育』，明治図書，1978年，原著刊行1915年

参考文献

- (1) V. ローウェンフェルド，竹内清/他訳『美術による人間形成』，黎明書房，1995年
- (2) 日本放送協会（NHK），『NHK for School「ものすごい図鑑カブトムシ」』，2015年
<http://www.nhk.or.jp/school/sukudo/zukan/#beetle>